東京福祉会だより

響

響

ひびき　〝響〟とは「郷」の「音」と書きます。私ども東京福祉会では、この温かなものを大切に「心に響く葬儀」を目指しております。

第69号　平成26年1月（通刊92号）発行

新年のご挨拶　理事長　原山　陽一

『伝えられる恕の心』《作家》　童門　冬二　氏

物故者慰霊法要 報告と御礼

葬祭ディレクター技能審査 結果の発表

体験寄稿文『伴侶を失って』　F・Sさん

読者の皆様の作品発表／お知らせ・資料請求

「東京福祉会だより（響）」は、個人会友、団体会友の皆様をはじめ都内の各福祉事務所・施設などに、配布しております。

大正8年創立

社会福祉法人 東京福祉会

道灌山会館　江古田斎場　ホール多摩国立

新年のご挨拶

社会福祉法人東京福祉会
理事長　原山　陽一

新年明けましておめでとうございます。心から新春のお慶びを申し上げます。

本年が東日本大震災復興の確かな手応えとオリンピックに向けた順調な歩みを実感できる年となりますよう、皆様とともに祈りたいと思います。

当会は大正8年の創立から今年で95年を迎えます。この間、時代の変遷、社会の変化、人々の意識・価値観の多様化に即応しながら、地域福祉を支える社会資源として、その役割の一端を担ってまいりました。

これもひとえに会員の皆様、当会をご利用いただいた皆様、そして地域の皆様のあたたかいご理解とご支援の賜であり、新年に当たり改めて感謝を申し上げる次第でございます。

さて、最近「ニューノーマル」という言葉を耳にします。予測しがたい変化が何時起こるかわからない、過去の延長線上に収まらない変化が頻繁に起きる時代になったことを意味する言葉として使われているようです。

当会におきましても、昨年は特に震災対策に力を入れ、各斎場に自家発電装置を設置するとともに2か所に震災井戸を掘削し、安心してご利用いただける施設整備を行いました。

こうした時代であればこそ、多様化するお客様のニーズにお応えし、安心かつ心のこもった質の高いサービスでお手伝いをすることが、私たちの役割だと深く認識いたしております。

本年が皆様にとりまして佳き年でありますよう心からお祈り申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

平成26年　元旦

伝えられる怨の心

作家　童門　冬二

「論語」の中にこんなエピソードがある（意訳）。子貢（しこう）という弟子がある日孔子に向かってこんなことを言った。

「先生には三千人もの門人がいらっしゃいますが、わたくしはその中で一番頭が悪いと思います。その頭の悪いわたくしが、先生がお示しになるたった一文字を生涯守り抜けば、人間として間違いなく生き抜ける、という字がありましたらお教え下さい」。これに対し孔子は「子貢よ、それは怨という字だよ」と答えた。

おそらく子貢は字引を引いたのに違いない。字引には「怨とは、相手に対する思いやりと優しさのことをいう」と書いてあった。また「ゆるす」とも書いてある。子貢は感動した。孔子先生が教えてくださったのはいつも他人の立場に立って物を考える、こちら側の優しさと思いやりの心のことをいうのだ。「わたしはこれを生涯守ろう」と決意した。

江戸時代の心ある政治家や行政マンは、すべてこの「怨の心」を守った。早く言えば、「相手の身になって物を考え、それに対する手を打つ（施策を行う）」ということである。

徳川時代を眺めていて、はじめて「市民の存在」を大事にしなければならない、と考えたのは第八代将軍徳川吉宗だと思う。吉宗は和歌山藩主から八代将軍になった人物だが、和歌山で今でいう地方行政を行う場合にもすでに「目安箱」を設けていた。和歌山城の大手門の前にこれを据え付け、藩民からの意見を受け付けた。これをそのまま江戸城に持ち込んだ。現在東京都千代田区の東京銀行協会のあるところは、江戸時代は幕府の評定所だった。今でいう最高裁判所である。したがって裁判関係の人の出入りが多い。その人の集まるところに吉宗は「目安箱」を設置した。目安というのは船の行方を決める羅針盤のことである。したがって吉宗にすれば、「江戸市民の意見を尊重しながら国政を行おう」ということだ。この目安箱を開けるのは吉宗ひとりであって、立会いに江戸町奉行の大岡忠相を呼んだ。広げた意見書の中で役に立つものを大岡に与え、「これを実行せよ」と命じた。あるとき神田あたりに住む町医者の小川笙船という人物が、

・江戸市内には身寄りの無い高齢者が沢山おります
・病気になって放置しておけば死んでしまいます
・お上の手でこれらの老人を収容する施設をお作り下さい。できた暁には、われわれ町医者が相談して交替で看病に当たります

吉宗は感心した。早速大岡を呼んで「これをつくれ」と命じた。大岡は小石川（東京都文京区）に「小石川養生所」と銘打って施設をつくった。現在その跡が小石川植物園内に保存されている。今は井戸しかない。しかし笙船がその時希望した「同時に漢方薬の国産化をおはかりください」という願いに応じて、数百種類の薬草を植えた。この薬草園は現在もかなりの植物が植えられて保存されている。東京大学の所管になっているときいた。小石川植物園はいうまでもなく、四季折々の植物を楽しむ都民が多い。吉宗は施設を作っただけでなく、初代の院長（所長）に投書者の小川笙船を登用した。これが山本周五郎さんの小説〝赤ひげ〟のモデルになる。黒沢明さんも映画にした。三船敏郎が笙船になって活躍した。

小石川養生所はそのまま幕末まで運営される。これを寛政の改革期に引き継いだのが白河藩主松平定信である。江戸時代の政治制度は面白い。それはどこかの藩主（首長）が現任のままで老中（閣僚）になることだ。したがって、ナンとか大臣はすべてナンとか県かナンとか市の首長である。これが良い方に作用すれば、それぞれの閣僚が藩で実行した善政を、そのまま国政に持ち込める。善政というのは、「民が喜び歓迎した施策」のことである。松平定信は吉宗の子田安宗武の長男になる。つまり吉宗の孫に当たる。白河藩主になった時から吉宗を尊敬していた。だからそのまま老中に転役したときも、「祖父の理念をそのまま幕政に生かそう」と思い立った。祖父の理念というのは「怨の心」のことである。江戸時代は徳川家康が大坂の陣後に平和宣言を行い、今まで戦国武将を支配していた仏教（特に禅）を退け、古代中国の思想である「儒学」をその代わりにした。儒学の中心は何といっても

「論語」だ。したがって徳川時代の武士は、幕臣であろうと藩士であろうと、子供のときから「論語」を徹底的に叩き込まれた。かれらが目指したのはあくまでも「王道政治」であり、特に心構えとしては「民に対し恕の心を持つ」ということを共通させた。

松平定信は大名の中でも、特にこの朱子学への造詣が深くまた国学にも明るかった。かれが白河藩主時代にはじめて「老人の日」を設けている。毎月日を決めて小峰城（現在修築中）の大広間に招待し、ご馳走しながらこもごも藩政に対する忌憚の無い意見を聞いた。老人たちには大受けだった。このやりとりからやがて「間引き」という悪習を断つために、米の増反が計られた。当然灌漑用水の水源がいる。水源として老人たちは南湖を勧めた。

さらに、

「おじい様を見習って、南湖の周りを公園化してください」と頼んだ。吉宗の時代に江戸の程度の悪い歓楽施設を追放し、大岡に隅田堤・玉川堤・飛鳥山など三つの桜の名所を作らせたのも吉宗だったからである。定信はこれを実行した。現在の福島県立南湖公園である。広く市民に開放する公立公園の最初のものではないかと思う。これもすべて定信の〝恕の心〟による行政の現われだ。

幕府の老中になった定信はまず「小石川養生所」の財政運営が、かなり幕府財政に影響を与えていることを知った。つまりそのころの幕府役人にすれば、小石川養生所は〝金食い虫〟だったのである。定信はここまでも恕の心を発揮した。江戸の市民たちに呼びかけ小石川養生所の経費の一部を負担してもらえまいか、と持ちかけた。江戸の町会長たちはたちまち賛同した。それはいつ自分たちも小石川養生所のご厄介になるかわからない、という気持がそれぞれあったからである。小石川養生所は明治維新後も新政府に引き継がれた。江戸町奉行所は東京市役所と改称し、同時に小石川養生所も東京市立養育院になった。この院長を買って出たのが渋沢栄一である。栄一は日本の財政を近代化し、そのために資本主義を持ち込んだ。株と銀行の設立に努力した。しかしその渋沢は子供のときから祖父や父や叔父に論語を叩き込まれて論語の申し子のような人物だった。かれが明治六年につくった国立第一銀行での訓示は、募集した銀行員たちに対し、

「論語とソロバンを一致せよ」と告げたのは有名な話である。養育院長になった渋沢はもちろん専業ではないが、東京市長に、

「このポストは死ぬまでやらせてほしい」と頼んだ。昭和六年に渋沢栄一は九十二歳で亡くなる。しかしかれの数多い肩書きの中でも、最後まで消されなかったのが「東京市立養育院長」というものである。渋沢が論語の中で最も重んじていたのはやはり「恕の心」である。

したがって、「恕の心」は、良識のある役人の心から心に伝えられ、今も脈々として生きている。時代がどう変わろうと、時の政治の流れがどう変わろうと、この心は変わらない。東京都の福祉施設で働く職員の皆さんには、必ずこの〝恕の心〟が自分では気がつかなくても胸の底に、しっかりと据えられているはずである。そう信ずるし、また信じたい。

童門　冬二　（どうもん・ふゆじ）

本名　太田久行。昭和2年、東京に生まれる。
　かつて東京都庁に勤め、都立大学事務長、広報室課長、企画関係部長、知事秘書、広報室長、企画調整局長、政策室長などを歴任して退職、作家活動に入る。
　歴史の中から現代に通ずるものを好んで書く。執筆活動のかたわら、講演活動も積極的に行っている。
第43回芥川賞候補。日本文芸家協会会員、日本推理作家協会会員。
平成11年　勲三等瑞宝章受章。

<主な著書>
「小説　上杉鷹山（上・下）」、「近江商人魂（上・下）」、「情の管理・知の管理」、「大江戸豪商伝」、「渋沢栄一　人間の礎」、「田沼意次と松平定信」、「国僧日蓮（上・下）」、「吉田松陰（上・下）」、「河井継之助」、「直江兼続（上・下）」。

<近著>
「退いて後の見事な人生」、「近江商人のビジネス哲学」、「歴史の教え」、「巨勢入道河童　平清盛」など

<最近の講演テーマ>
○歴史に見る地方分権 ○歴史に学ぶまちづくり ○歴史に学ぶリーダーの条件　○歴史に見る激動期の経営者　○いま、日本に求められるもの―歴史から学ぶ人間関係―　○歴史に学ぶ経営術　○変革期のリーダーシップ　○歴史に学ぶ経営改革―地方分権時代の経済と社会―　○歴史から学ぶ人材育成法　○歴史に学ぶリーダーの資質　○上杉鷹山に学ぶリストラ　○生かそう、日本の心　○先人に学ぶ働くを粋にする生き方。

平成25年度　物故者慰霊法要 報告と御礼

昨年10月22日に練馬区の江古田斎場で、11月7日には国立市のホール多摩国立におきまして聖恩山霊園納骨物故者永代慰霊法要を行いました。
この慰霊法要は、聖恩山霊園に眠る御霊に鎮魂の祈りを捧げる事業でございます。
当日は、東京都、都内各福祉事務所、各施設の皆様方並びに当会の原山　陽一理事長はじめ役職員が参列し、聖恩山霊園堀内　是長導師の読経のもと、ご供養させていただきました。

東京福祉会
原山 陽一　理事長

東京都福祉保健局
川澄 俊文　局長

江古田斎場では、東京都福祉保健局長の川澄　俊文様に、ホール多摩国立では、東京都福祉保健局西多摩福祉事務所長森泉 旬子様にそれぞれご丁重な来賓ご挨拶を賜りました。法要後多くの方々に納骨堂など、尊い御霊を安置する施設をご視察いただき様々なご質問など高い関心が寄せられました。
聖恩山霊園では、現在約41,700余柱の御遺骨をお預かりしておりまして、関係者の皆様におかれましては、ご多忙の折とは存じますが、年に一度のこの法要に是非とも多くの皆様にご参列賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

ご参列いただきました皆様に、心から深い敬意と感謝を申し上げます。
誠にありがとうございました。

ご葬儀の際にお得な特典がある、

会友制度Bプラン に加入しませんか。

※Bプランは生前に加入する必要があります。

基本葬祭料金 **30%割引**

＋

10 の特典

特典

1. 直営斎場利用料金50%割引
2. 貸し式場費用10%補填サービス
3. 生花1基サービス
4. 花とみどりのギフト券 10,000円分進呈
5. オリジナルエンディングノート 進呈
6. オプション品10,000円分値引き
7. 生花10%割引（祭壇脇生花等）
8. 関係機関誌の進呈
9. 出張講話会の開催
10. 葬祭に関する各種無料相談

加入金 **10,000円**　加入金のみで、月々の掛金・年会費は一切不要です。

現在、Aプランにご加入中の方は、加入金**9,000円**で会友Bプランに変更することができます。

社会福祉法人 東京福祉会 渉外部

03-3823-8026

ホームページからも加入手続きが行えます。

東京福祉会　検索　詳しくはホームページをご覧ください。

「会友Bプランご加入キャンペーン」の御礼

キャンペーン期間中、多くの皆様にご加入いただくことが出来ました。
ご加入いただきました皆様、誠にありがとうございました。
皆様のお心にそうべく、サービス向上に一層努めてまいります。

～葬祭ディレクター技能審査結果の発表～

平成25年度（第18回）厚生労働省認定葬祭ディレクター技能審査結果が発表されました。

当会においては、全職員が一級葬祭ディレクターの資格を取得するよう、積極的に奨励しております。

今回は5名の職員が合格し、一級葬祭ディレクター資格者総数は74名、葬祭部門全職員の86%を占めることになりました。

当会では「葬祭ディレクター」の資格と豊かな経験を活かし、これからも安心、納得そして〝心に響くご葬儀〟をサポートさせていただけるよう精進してまいります。

※葬祭ディレクター技能審査制度は、葬祭業界に働く人にとって必要な知識や技能レベルを審査し、証明する制度で、厚生労働省認定の資格制度です。

体験寄稿文

伴侶を失って

F．S（練馬区在住）

平成24年4月に掛け替えのない伴侶を失って1年と数か月になります。静かに人生の幕を引いた夫は、89歳の素晴らしい生涯だったと思います。13年余の闘病生活ではありましたが、見事な最期でした。それに反して私は、準備も介護もなし得ず、大切な人を失って唯々後悔の日々でした。呼応のない主人との対面は、声も涙も出ませんでした。

皆様に支えられて野辺の送りを済ますことが出来て、家に帰り一人になった時の、あの喪失感は今でも孤独と静寂さに押し潰されそうな、自分であったことを記憶しています。

56年と数か月の結婚生活は幸せでした。自由気ままにさせてくれた夫への感謝の気持ちが増幅し、反省の日々でした。なかなか元の自分に戻れず、子ども達にも心配をかけていました。そんな時に「わの会」の案内に接して重い心と足を引きずりながら、娘に付き添われて参加させていただきました。

三橋尚伸（みつはし　しょうしん）先生との出会いと喪の体験をなされた方々に出会い、尊いお話を聴くこと数回、回を重ねる度ごとに徐々に自分を取り戻してきたように思われました。

三橋尚伸先生の講演、皆様方の体験談、そして「わの会」で初めてお逢いした方々の明るい表情等から、89歳の老婆もエネルギーをいただき、残された人生は短いけれど、自立して生きてゆこうと思うようになりました。「わの会」で救われたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

「わの会」のこの指向は素晴らしい志向だと思います。そして会場では、職員の方々の優しい笑顔に接しられる喜びも、癒しになっていると思います。

長い老々介護から解放され、今は趣味の短歌・陶芸・コーラスに励みつつ、仏壇の主人に楽しい報告をしております。庭に来て遊ぶ蝶にも、主人が姿を変えて遊びに来てくれたのだと、思えるようになりました。

喪失の痛み・悲しみ、さみしさ・切なさを本当に理解できるのは、喪に服した体験者のみと思われます。

どうぞ皆様も心の平穏を得て、乗り越える方法を見出して、余生をいきいきと楽しく送っていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

酸素器を背負いて夫に寄り添ひぬ
何人（たれ）にも逢はない山荘の小路
（軽井沢にて）

天上界論戦俄に活気づき
畏友にまみえて笑顔の浮かぶ
（主人を連想して）

読者の皆様の作品

俳句

S.Y（練馬区在住）

仲見世の賑ひやまず芭蕉の忌

あらたまの元日試筆ままならず

今日の幸明日へと繋ぐ初雀

大寒の空を突き刺すスカイツリー

短歌

Y.K（練馬区在住）

藤の棚おさげ髪なるあの頃を
想ひて聴きしチターの音色

あれや此の芥積りし胸のうち
溶けて滴る齢八十なる

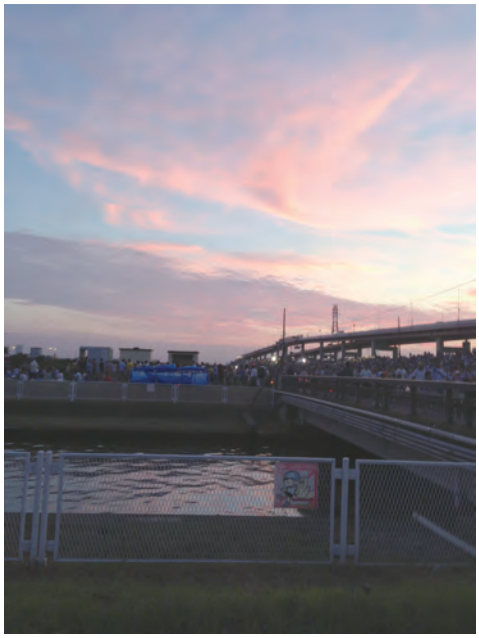
永き日を臥せたる夫は言葉失せ
眼と眼の会話心繋がる

写真

K.M（府中市在住）

ヴィクトリアの滝

E.N（足立区在住）



夏の夕暮れ

＜お知らせ＞

◎「東京福祉会だより（響）」のホームページ掲載について

広報活動の一環として11月1日から当会のホームページに「東京福祉会だより（響）」第60号（平成23年3月発行）以後の毎号を掲載しております。是非お気軽にご覧ください。

◎大泉葬祭相談センターの営業終了について

大泉葬祭相談センターは、平成26年2月末日をもちまして営業を終了することになりました。この間、多くの皆様にご利用・ご活用いただき、あたたかいご支援・ご愛顧、誠にありがとうございました。

なお、当会では相談事業を引き続き実施しておりますので、これまで同様、お気軽にご相談ください。お問い合わせ先は右記のとおりです。

■葬儀に関する詳しい資料（施設案内、料金表〈仏式、神式、キリスト式、花祭壇など〉）をご用意しております。お気軽にご請求ください。

①仏式のご案内　②花祭壇のご案内　③道灌山会館のご案内　④江古田斎場のご案内
⑤ホール多摩国立のご案内　⑥会友制度のご案内　⑦葬祭のしおり

■各種相談のお問い合せ・資料のご請求はこちらまで

電話 **03-3823-8026**
東京福祉会 渉外部
〈E-mail〉 info@fukushikai.com

東京福祉会 検索
http://www.fukushikai.com

「東京福祉会だより（響）」は再生紙を使用しています。

VEGETABLE OIL INK

発行所　社会福祉法人　東京福祉会　〒113-0022　東京都文京区千駄木3−52−1　電話03(3823)8026